

2024. 8. 25 (日) 使徒18:5~11

18:5 シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した。

18:6 しかし、彼らが反抗して口汚くののしたので、パウロは衣のちりを振り払って言った。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」

18:7 そして、そこを去って、ティティオ・ユストという名の、神を敬う人の家に行った。その家は会堂の隣にあった。

18:8 会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。

18:10 わたしがあなたとともにいるので、あなただけを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

18:11 そこで、パウロは一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

<説教>

使徒パウロの第2回伝道旅行中、コリントでの福音宣教の様子です。コリントに来たとき〈弱く、恐れおののいていた〉(Iコリント 2:3)パウロに、神はまずアキラとその妻プリスキラ夫妻に出会わせてくださいました。パウロは二人の家に住み、平日は二人と一緒に天幕造りの仕事をしながら、安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとしてきました(3-4)。何を〈説得しようとした〉かと言えば、もちろん今まで通り聖書に基づいて〈イエスがキリストであることを〉(5)でした。

そんなパウロでしたが、〈シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念〉するようになります(5)。パウロがコリントに来る前、アテネに来たとき、シラスとテモテと一緒におらず、マケドニアの〈ベレアにとどまっ〉ていました(17:14)。ベレアだけでなく、テサロニケやピリピといったマケドニア地方の教会で必要な働きがあったのでしょうか。その働きの中で、彼らはパウロの宣教の働きと生活のために必要な献金を集めましたのでしょうか。その献金を持って二人がマケドニアから来たのでパウロは天幕作りの仕事をする必要がなくなり、〈みことばを語ることに専念〉できるようになりました。後にパウロは「コリント人への手紙」で次のように言います。「私は他の諸教会から奪い取って、あなたがたに仕えるための給料を得たのです。あなたがたのところにおいて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニアから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたからです」(IIコリント 11:8-9)。「ピリピ人への手紙」でも言います。「それにしても、あなたがたは、よく私と苦難を分け合ってくれました。ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした」(ピリピ 4:14-15)。

パウロが〈語ることに専念し〉、〈証した〉〈みことば〉とは、〈イエスがキリストであ

ること)でした。(旧約)聖書に書かれ、約束されているメシア(即ちキリスト)とは、十字架につけられて殺され、三日目に死者の中からよみがえられたナザレのイエスのことだ、と〈証し〉つまり証言したのです。これも「コリント人への手紙」でパウロが言っていることです。「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです」(Iコリント 1:22-24)。「兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです」(同 2:1-2)。このようにパウロはコリントでも、まずはそこにいるユダヤ人たちに、そして安息日でも平日でも、〈イエスがキリストであることを〉証しし、イエス・キリストを信じるように説得しました。

しかしユダヤ人たちは〈反抗して口汚くののしった〉のです。それで〈パウロは衣のちりを振り払って言った。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」〉(6)。これと同じような事が既にピシディアのアンティオキアでもありました(13:45-46)。反抗されてののしられたパウロは短気を起こしたのではありません。「十字架で死なれ復活なされたイエスが神の約束のキリスト、唯一の救い主である。」こうパウロが〈御霊と御力〉(Iコリント 2:4)によって語った福音を聞きながらも、なお頑なに拒み信じない者は、つまりイエス・キリストを信じない人は、イエス・キリストに反抗する人は、わざわざ自分から神の恵みを拒絶する人であり、その責任はその人自身にある。イエスの福音をはっきりと正しく証し、信じるように説得するという責任を私は果たした。あなたがたの不信仰ゆえの滅びについての責任は私にはもはやない。そうパウロははっきりと宣言し、警告したのです。

こうしてパウロはユダヤ人の会堂を〈去って〉、〈ティティオ・ユストという名の神を敬う人〉つまり〈異邦人〉の家に行きました。ただしそこは〈会堂の隣〉でした(7)。ティティオ・ユストは以前から隣の会堂に通っていましたが、パウロが会堂を去るというので、パウロを自分の家に受け入れることにしたのでしょう。自分もユダヤ人たちから反抗され口汚くののしられる危険をも顧みない信仰と勇氣ある行動だったと思います。

そんな〈神を敬う人〉の姿に心動かされたか、ユダヤ人の〈会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じ〉、〈また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受け〉ました(8)。反抗され、ののしられても妥協せず、福音を曲げないで聖霊の力によって語るなら、聖霊が働かれ、ユダヤ人でも異邦人でも主イエス・キリストを信じるように召され、選ばれた人の心が開かれ、信じるのです。

そしてパウロのコリント宣教において大きな慰め励ましとなった主のみことばが語られました(9-10)。パウロが抱いていた〈恐れ〉とは何だったか。単純に考えて、やはりユダヤ人の〈危害〉だったと思います。〈会堂司〉とその〈家族全員〉までもが、また多くのコリント人(異邦人)が福音を〈聞いて信じ、バプテスマを受け〉たことをねたむユダヤ人たちによる迫害は、生身の人間パウロにとっては決して楽しいものではありませんでした。もちろん、主のためのものではありませんが、〈危害〉は〈危害〉です。しかし「わた

しがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。」とまず主は約束してくださいました。パウロがユダヤ人の会堂を去ったからといって、それで主なる神がパウロから去ってしまわれることはない。主の守り助け慰め励ましがパウロから去ってしまうことはない。そして語るべき「神のことば」、主イエス・キリストの福音のことば、〈十字架のことば〉がパウロから取り去られることはない。主が〈世の終わりまで、いつも〉あなたとともにいてくださり、あなたが語るべきことを教えてくださる。そう主は約束してくださいました。「今から私は異邦人の方に行く」というあなたの選択は正しい。いやそれがわたしの命令だった（13:47）。だから異邦人中心の、商売繁盛、偶像礼拝と淫乱の町コリントの中でも恐れるな、ユダヤ人たちの顔色を伺うことなく語れ、黙るな。これまで語って来たように、十字架のことば、イエスの福音を異邦人の間でも恐れることなく、黙ることなく、語れ。聞く人は少ないと考えてはいけない。わたしの声を聞き分け、わたしの声に聞き従う、わたしの羊たち(cf.ヨハネ 10 章)、わたしの民がこの町にはたくさんいるのだから。わたしの民のことはわたしがあなたよりも良く知っており、見ている。そんなふうに主はひたすらパウロを励まし、強めてくださいました。

数え切れない多くのキリスト者がこの主のみことばによって慰め、励まし、力と勇気を頂いて来ました。私たちがまたその一員としていただきたいと願います。